

実生活に生きる国語力の育成  
—「書く」力をつける授業づくり—

長野県飯山市立城北中学校  
教諭 関口祐子

1 研究のねらい

国語科の授業は「読むこと」の学習に傾倒しがちだと耳にしたことがある。私自身もこれまで、「読むこと」の教材に力を入れることが多く、「書くこと」の単元に時間を割いてくることは少なかった。生徒には「意見文」や「課題作文」などの課題を課しても、その「書き方」や「書くためのポイント」などの指導が不十分であると感じていたため、今年度はそこに重点を置き、自分の授業改善を図ることを考えた。城北中学校全体の実態としても、全国学力状況調査及び飯山市総合学力調査(国語科)の結果から、「筋道を立てて考えること」や「表現の仕方について捉え、自分の考えを書くこと」に特に課題があることがわかり、やはり「書く力」を高める学習が必要であると考えた。

しかし「書くためのポイント」を教師が紹介するだけでは受動的な学習になることが懸念された。そこで、生徒自身が説明的文章を「読む」中で、筆者の書き方の工夫に気づくことができれば、生徒自身が「書く」時にもどんなことに気をつけて書けば良いかがわかると考え、年間を通じて説明的文章を「読む」学習を中心に、相手にとってわかりやすい文章を書くための「視点」を習得していくことを試みた。ここで言う「視点」とは、例えば「この説明的文章の書き手は語りかけるような口調で書いている」などの、「目のつけどころ」のことである。そして、子どもたちの気づきを「わかりやすい文章を書くためのアイテム(視点)」と題してまとめ、教室に掲示していった。

さらに本校では、生徒が自ら考える力をつけるための「グループ活動」と「振り返り活動」を研究の重点としており、全職員が授業に取り入れている。「グループ活動」と「振り返り活動」を通して、主体的・対話的に友と関わり合いながら、書く力を高める(深い学びを実現する)ことを目指し、本研究でも取り入れて授業を展開した。したがって本研究における「書く」力をつけるための手立ては、大きく分けると「わかりやすい文章を書くためのアイテム(以下「アイテム」

と表記する)」、「グループ活動」、「振り返り活動」の3つということになる。

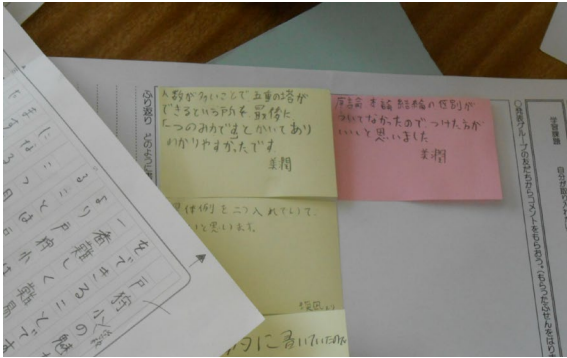
2 研究の経過と内容

(1) 6月に行った授業の様子から

6月の段階では、説明的文章である『ちょっと立ち止まって』を読みながら、書き手の表現の工夫に対する子どもたちの気づきをまとめていった。子どもたちは本作品を通して、「①具体例を入れる」「②文末を話しかける口調にする」「③序論・本論・結論のまとまりで書く」という書き手の工夫に気づき、それを教師が「アイテム」として位置付けた。これら3つの「アイテム」が学級に位置付いたところで、「アイテム」を意識して「書く」授業を行った。

主眼 「わかりやすい文章にするアイテム」を習得した子どもたちが、他の小学校出身の友だちに自分の小学校の魅力を伝える文を書く場面で、「具体例の数」や「文末表現」、「説明の順序」などに注意したり友だちと意見交換したりしながら、わかりやすい文章を目指して書くことができる。

子どもたちが「書く」にあたって、目的意識がないまま書いても主体的な取り組みにはなり難いので、「目的意識」と「相手意識」を生徒が持ち、書く必要感を感じながら書くことができるよう題材探しにも気を配った。上記主眼の通り、本時の「目的意識」は「友だちに自分の出身小学校の魅力を伝えること」であり、「相手意識」は「他の小学校出身の友だち」である。出身校が重ならないようにグループ分けをし、書いた文章を読み合い、文章から小学校の魅力が伝わってくるか、3つの「アイテム」の観点から評価し合った。この際、友だちからもらったコメントをもとに、あとで自分で推敲できるように、コメントは付せんに書いて渡すように指示をした。良いと思った点については黄色の付せん、改善点にはピンク色の付せんを使うよう促し、区別ができるようにした。また、付せんの書き方の見本を提示しながら、必ず理由も書くように促した。



授業の様子を、「H 生」の姿から考察する。H 生はもともと書くことに苦手意識があるわけではなく、自分の小学校ではスポーツが盛んであったということを手紙に伝えようとして書き進めていた。文章量を多く書くことはできたが、新しく学習した「アイテム」を意識した書き方はできていなかった。本時の開始時に「自分が特に取り入れたいアイテムを書こう」と指示された際にも、何も書いていなかった。「H 生」には「アイテム」の必要感が感じられていない様子であった。その後、グループでの話し合いでコメントをもらっても、もとの文章に書き加えることはしていなかった。しかし、全体の前で教師が指名した T 生の発表を聞くと、身を乗り出して聞いていた。発表した T 生は、「話しかける文末にする」というアイテムを取り入れて書いている生徒であった。その発表を聞き、H 生は「本時の振り返り」で次のように書いた。

**(H 生の振り返り) 文末をしっかり書き、前置きや話しかける口調などで文を書くと、同じ内容でもかなり文の質が違ってくるのが分かった。**

この振り返りの内容から、H 生は、全体の前で取り上げられた友だちの発表を聞くことを通して、アイテムのよさに気付いていったことがわかる。新しく学習した「アイテム」を取り入れることの価値を、H 生が感じ始めた時であったと考える。ただ自分の考えを書き連ねるだけではなく、どう工夫したら文章がわかりやすくなるかという視点（「アイテム」）を持って書くようになることは、H 生にとって非常に大きな変化であった。

子どもたちは、本単元で習得してきた「アイテム」にこだわって自分で表現したり、「アイテム」の視点から友だちにコメントをしたりすることができていた。多くの生徒が、文章を読む際の「目のつけどころ」に気付き、視点の「広がり」を感じられたと思う。

「グループ活動」については、友だちの文章を読み自分の文章に生かせそうなことを発見したり、友だちからのコメントで文章がより充実したりすることを感じている生徒も多く、「主体的な学び」に「グループ活動」はやはり大きな一助になると感じた。ただ、コメントし合う前に、子どもたち同士で自己課題（自分がこだわりたいアイテムや困っているところなど）を伝え合うよう指示しなかったため、自己課題についてコメントがもらえなかった生徒もいた。グループ活動をする際には、仲間の自己課題をグループ内で共有してから話し合う必要があるということが反省点である。

「振り返り活動」については、自分の言葉で自分がわかったことを記述することで、子どもたち自身が本時の学びを整理し次につなげるための大切な時間になったと考える。H 生のように、子どもたちの学びは1時間のどの瞬間にあるかはわからないので、授業の最後に振り返りの時間を確保することは、教師が子どもたちの学びを見届けるためにも非常に有効であると考えられる。教師が子どもたちの振り返りの内容に基づき次の授業の導入を行うことも重要であろう。

(2) 6月以降に習得した「アイテム」について

時期	○説明的文章の学習、「書く」学習 ・生徒の気付き、おさえたポイント
5月	○説明文『ダイコンは大きな根?』 ・段落の役割・段落同士の関係
6月	○説明文『ちょっと立ち止まって』 ○出身小学校の魅力を友だちに紹介する文章を書こう ・具体例の用い方と数・文末表現 ・説明の順序（序論・本論・結論の三段構成） ・既習の「アイテム」を用いた書き方
7月、8月	○意見文を書こう ・「他にはない」「自分だけ」の内容を入れる ・感想や自分の気持ちを入れる ・既習の「アイテム」を用いた書き方
9月	○言葉『指示する語句と接続する語句』 ・指示する語句・接続する語句の種類、働き
10月	○説明文『幻の魚は生きていた』 ○新一年生に中学校の魅力が伝わるようにわかりやすい文章を書こう ・接続語の使い方 ・既習の「アイテム」の効果考えた書き方

上記の表の「○」で示した学習を通して、「わかりやすい文章を書くためのアイテム」を生徒と相談しながら次のようにまとめていった。

- ①具体例を入れる
- ②話しかけるような文末で書く
- ③三段構成（序論・本論・結論）で書く
- ④「他にはない」「自分だけ」の内容を入れる
- ⑤感想や自分の気持ち、その根拠となる事実を入れる
- ⑥接続語を使う

これらの「アイテム」は全て使えば良い文章になるというわけではなく、必要な場面で自分で選び効果的に用いることができるかどうかも「書く力」と考える。

(3) 10月に行った授業の様子から

①～⑥の「アイテム」のうち、⑤までは意識しながら意見文を書く学習を行ったが、「⑥接続語を使う」ことを「アイテム」として位置付けた後に書く学習を行っていなかったため、「⑥接続語を使う」ことに着目して「書く」学習を展開した。

主眼 どのような接続語をどこに使えるか魅力が伝わる文章になるか考える場面で、グループの友だちとお互いの文章を読み合い、接続語の使い方について「比較・追加・消去」の3つの観点から意見交換をしたり「ベスト・オブ・振り返り」を決めたりすることを通して、魅力が伝わる文章にするための接続語の使い方についての気づきが増えたり、接続語の効果的な使い方を理解したりすることができる。

今回の「目的意識」は「新一年生に中学校の魅力を伝えること」、「相手意識」は「新一年生」である。城北中学校では毎年秋に「新一年生説明会（体験入学）」が行われているので、それを題材として設定した。なお、「相手」が鮮明に見えるよう、小学校に協力を仰ぎ「中学校生活で不安なこと・楽しみなこと・質問」といった項目のアンケートに答えてもらった。アンケート結果を1人選び、その相手に返事を書くという形にしたことで、常に相手を意識しながら子どもたちは書き進めることができた。「グループ活動」については、自分が困っているところや助言が欲しいところをグループの仲間に伝えてからコメントしてもらうという方法をとった。

6月に注目したH生の様子から、今回もその変化を考察する。H生の「相手」は、泉台小学校六年のMさんで、小学校時代親しくしていた相手のようだった。H生は、本単元の当初から、アンケートに答えてくれ

た相手の顔を思い浮かべ、「Mさんはこれでわかるかな。」などと口にしながらか意欲的に取り組んでいた。「具体例を入れる」ことや「語りかけるような文末にする」などの既習の「アイテム」を用いて工夫して書き進める姿も見られた。前時、例示された文章をもとに接続語をどのように用いればいいか全体追究で学習すると、H生は次のような振り返りを書いた。

**(H生の前時の振り返り) 接続語を使うと、前の文とくっついている文とのちがいや共通点がよくわかった。**

H生は「接続語」のもつ「前後の語句や文がどのような関係でつながっているのかを示す」という性質をよく理解していることがわかる。「接続語」を使うことのよさを感じたH生は自分の文章を読み直し、以下のように接続語を追加していった。

こんにちは。私は一年二組のHです。Kさんが中学校生活を楽しく送れるように、アンケートからとって紹介します。

まず、いちばん楽しみなのは部活と書いてありましたね。部活は十一種類あって、野球・男子バスケ・女子バレー・アルペンスキー・クロスカニー・陸上・技術・美術・吹奏楽・卓球・剣道があります。その中でも技術部がピンとこないかもしれませんが、技術部の活動は、ロボットなどを作り、大会もあります。**また**、スキー部は、夏は走ったりして体力をつけたり、陸上部と合同で駅伝部になったりします。**ところで**、一番不安だと書いてあった先輩との上下関係のことを説明します。先輩たちはすごく優しく、少し失敗したくらいじゃそんなに怒りません。**しかし**、会ったら「おつかれさまでーす」と大きな声で言った方がいいです。大きな声であいさつをすると、先輩たちも「やる気あるな。」と思います。**そして**、テストは五教科あって、国・数・社・理・英があります。授業の内容をちゃんとノートにとって、予習・復習をちゃんとすれば目安の合計400点はとれると思います。自分もまあまああして、400点とれているので、Kさんも大丈夫です。

これで、中学校の紹介を終わります。少しですが、わかったでしょうか。中学校は楽しいところです。ぼくも新一年生が来るのを楽しみに待っています。

□で示した接続語が、H生自身が追加したものである。本時では、これらの接続語があった方が本当にわかりやすくなるか相談したり、他にもふさわしい接続語があるか「接続語の分類表(教師が作成したもの)」をもとに比較したり、なくした方がすっきりするかなどを考え消去したりすることをグループで行った。

H生はグループの友だちから、「また」「しかし」「そして」については、あったほうがわかりやすいという意見をもらい、そのまま書き残している。「ところで」については友だちに「さて」の方がいいのではないかと指摘され、悩む姿があった。指摘した友だちのふせんには『「ところで」はそれまでと全然関係のない話に変わるけど、学校の話は続いているから、「さて」で切り替えたほうがいい。』といった内容が書いてあった。どちらも転換の接続語ではあるが、ふせんで指摘した生徒は「接続語の分類表(教師より別紙で配付)」をもとに「ところが」の特徴をとらえ、的確に指摘することができていた。その指摘をもとに何度か書き比べた後、H生は「ところが」を「さて」に書き直した。そして本時の学習を、H生はこのように振り返っている。

**(H生の本時の振り返り)「さて」を使って、前と後の文をくっつけたら読みやすくなった。前の文と後の文を比べて、接続語を使ってつなげて書くことができた。**

6月の段階では、「アイテム」を使うことで文の質が変わることに**気づき、理解したH生が、今回は「アイテム」を使って書くことができるようになった**ことがわかる。「アイテム」が形だけのものではなく、H生の「知識」となり、「表現」する力をつけていったと考えている。

### 3 研究のまとめ

グループ活動については、必要感のある活動になるよう自分の課題をグループの仲間と共有し、それに対してコメントをもらうことが非常に重要であった。付せんを書いて伝えるという方法については、書くことに時間を取られてしまうという点もあるが、後でコメントを見返すことができるという利点がある。話をしながら言われたことをメモすることができるようになれば、使わなくても良いかもしれない。

「振り返り活動」については、その時間の学びについて振り返ることで、子どもたちが「わかった」「でき

た」と実感することができ、学習意欲にもつながると考えられる。城北中学校では全教科で統一して振り返りの時間の確保に努めており、そうした積み重ねの中で、子どもたちに「自分の学びを振り返る力」がついていくと考えている。教師にはそれを見届け、次時に生かす力が必要となるだろう。

最後に「アイテム」については、どのように書けば良いか、焦点化して学級全体で学べたことが良かった。ただし、接続語を「追加」したり「比較」したり「消去」したりすることで文章を推敲した際、接続語をたくさん入れようという意識の生徒もいたので、今後はただ使うのではなく必要な場面で効果的に使えるよう、アイテムの質を高めていく必要があると感じている。また、現時点での「アイテム」は、子どもたちが気付いたことを気付いた順番に並べた状態になっているので、アイテムの分類をしていく必要があるだろう。たとえば、今回扱った「⑥接続語を使う」は文法上のアイテムであるが、「④「他にはない」「自分だけ」の内容を入れる」や、「⑤感想や自分の気持ち、その根拠となる事実を入れる」は内容面でのアイテムであるので分けられそうである。

ちなみに、この単元を通して仕上げた文章は、便せんに清書し、各小学校へ郵送した。「書き言葉」で表現したため説明会以前に読んでおいてもらうことにしたのである。説明会当日は、送った相手と1対1で会話をする時間を作った。



そこでは新一年生から「わかりやすかったです。」とコメントをもらい喜ぶ生徒が多く見られた。さらに返事を書いて来てくれた小学校もあり、「返事をもらえてうれしかった。書いて良かったです。」と感想を書いた生徒もいた。「書くこと」に達成感を得たのではないかとと思う。本実践のように実生活で生きる題材を選ぶことが何より有効な指導・支援になった。